下関西高等学校　進路だより

令和５年８月号　進路指導部

～燃えよ体育大会～身につけよう無敵の学力

いよいよ今週末に大きな学校行事である体育大会が実施されますが、準備は順調ですか？唐突ですが、**『体育大会は学力を高めるために重要な行事です！』**。だから、タイトルにも書いていますが、運動が得手不得手に関わらず前向きに一所懸命に取り組んで欲しいと思います。学力を高めることと学校行事にどんな関係があるのか？ピンとこない生徒もいるかもしれません。国語辞典には学力とは「学問の力量」「学習を通して得た知識と能力」であると書かれています。しかも、意外に思う人がいるかもしれませんが、日本では学力について法律でもきちんと規定しており、2007 年に学校教育法第３０条第２項において、学力とは

「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」

と規定されています。つまり、ここでの学力とは知識や技能を獲得することはもちろんですが、加えて、**『学ぶ意欲』**や**『自分で課題を発見し、『自ら学ぶ姿勢をもって』、『主体的に判断し』、『自ら行動し』、よりよく『問題解決する資質や能力』等まで含めたものだと考えられます**。「基礎的な知識及び技能を習得・・・」の部分は、端的に言えば、学科試験において高得点を取る力かもしれません。しかし、これは、**『持とうするのは当然だよ』**と言っているのです。

だから

学力 ≠ ペーパーテストで点数をとるだけの力

をお互いに理解しなければいけません。特に学校の主役を担っている君たち生徒、一人一人は

『自らの意思で前向きに日々学んでいる』か？

『責任をもって物事を判断している』か？

『その判断をもとに行動している』か？

『自分の事でなくても、何か問題があれば、それを解決しようとしている』か？

としっかり自分に問いかけながら学校生活を送ることがミッションとなります。そして、何より、この４点がそろっていなければ、本当の学力が身についているとは言えないということです。現在の大学入試はそれらを要求しており、各大学の**アドミッションポリシー**にきちんと書かれています。もちろん、学科試験で得点を取る学力は最も重要なことではありますが、これが全てではないことを十分に理解してください。そして。得点力以外の学力を身につけるチャンスの一つが「学校行事」であり、「体育大会」もしかりです。是非とも全力投球、完全燃焼できるように周囲と協力しながら進めていってください。

また、体育大会が終わると、３年生は共通テストの出願準備が控えています。素早く気持ちを切り替え、自分の進路に向けてギアを一段、二段と上げていってください。1、2 年生も授業などの学校生活にしっかり集中し、学力の向上に努めてください。期待しています。

さて、今年度も９月１日から総合型選抜の出願が開始されます。総合型選抜を皮切りに今年度の大学入試が本格化します。受験は冬のイメージが強く、暑い日が続くこの状況では実感がわきませんが、自覚していきましょう。そこで、昨年度の 2023 年度入試結果についてトピックも交えながら改めて説明しますので、確認をよろしくお願いします。

（次ページへつづく）

1 大学入学共通テストについて

まずは、3年目を終えた大学入学共通テストについてですが、志願者数の減少と平均点アップが大きな話題となりました。主催者である大学入試センターの発表では、最終集計での志願者数は512,581人で、前年より17,786人の減少となり、５年連続で減少となりました。次いで、平均点についてですが、2022年度の反動により2023年度では数学の数学ⅠAで17.7点、数学ⅡBで18.4点と大幅に上昇したことが注目を集めました。また、駿台予備学校とベネッセによるデータネット実行委員会の推計では、理科で実施された得点調整後にはなりますが、５教科７科目の平均点が文系で900点満点の532点と前年より24点、理系で551点と38点も上昇しました。ただし、これでもセンター試験時代よりも平均点は低めとなっており、分量の多い資料を読解する出題するスタイルは継続し、共通テストの出題形式や資料や問題設定の煩雑さは固定してきたと思われます。共通テストに必要な学力として、**短時間で多くの資料から適切に情報を読み取り、解答に必要な情報に正しくアクセスし、他の資料や教科書の学習内容と結びつけて考察する力が特にあげられます。**当然、読解力の養成に注視して、基礎知識の習得がおろそかになってはいけませんし、依然として基礎知識の正確な理解がなければ解けない問題は多く出題されています。これらを踏まえると共通テストはセンター試験時代以上にハイブリッドな学力が要求されると同時に、**今まで以上に授業を集中し、教員との対話を通して深く学んだことを自学自習でしっかり確認するという地道なことに粛々と取り組む学習姿勢が必要**だと言えます。

2 2023年度国公立大学入試総括

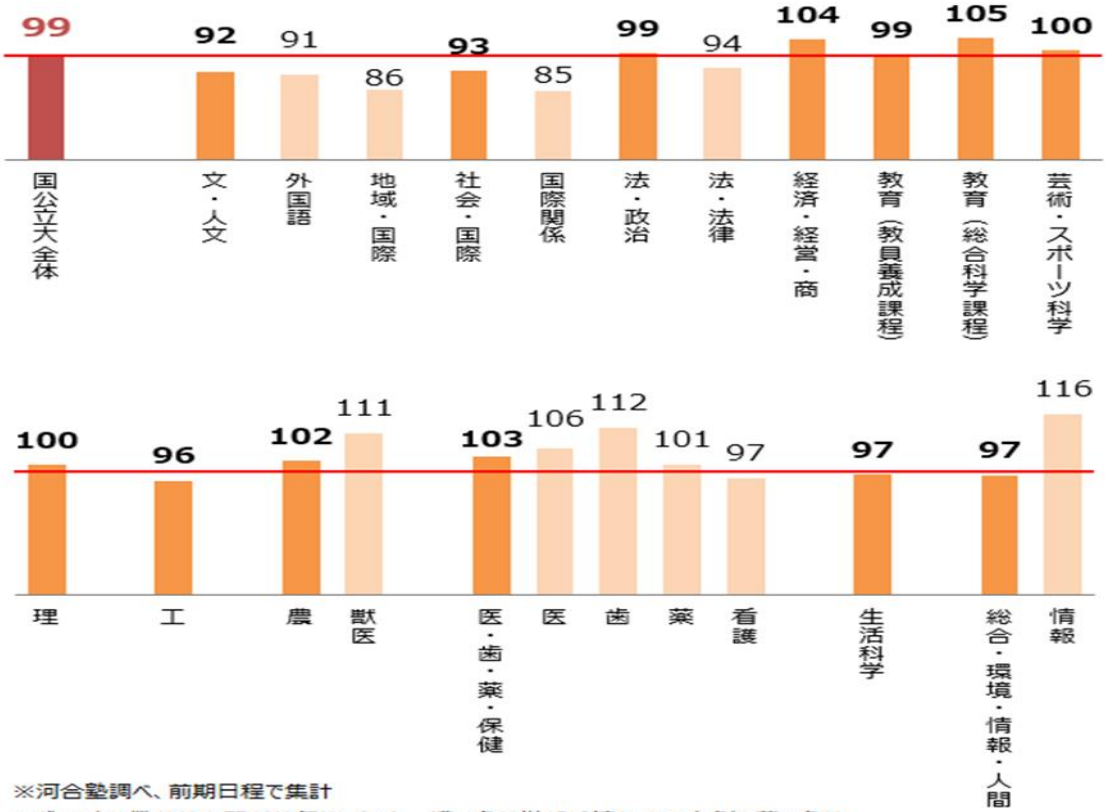
国公立大学の確定志願者数は423,180人と前年度より5,500人減少しました。その内、前期日程の志願者数は231,450人とこちらも減少しています。学部系統別の志願者数を確認すると、次ページの図で示されているように、文系では「経済学・経営学・商学」「社会学」の志願者が増加する一方、コロナ禍の影響で「外国語」「国際関係」などの学部系統が志願者を減らしています。一方、理系では「工学」の志願者が減少しましたが、「理学」「農学」は手堅く受験生を集めました。また、「歯学」「医学」などのメディカル系の人気は継続していますが、医学部は地方国立大学で隔年現象が目立ってきているので今年度も出願の際には慎重な判断が必要です。また、「理学」「農学」では女子志願者が増加しており、女子の志望の変化が伺えます。そして、昨年度入試で大きな話題を呼んだのが、各大学で理系の女子を増やしたいということから、大学入試の募集に**女子枠を設ける動き**が広がってきたことです。国立大学では、東京医科歯科大学と統合する東京工業大学が、2024年度入試から総合型選抜と学校推薦型選抜で物質理工学院など４学院において、58人の女子枠を新設します。さらに、2025年度入試では工学院など残りの学院でも85人の女子枠を導入し、合計で143人の女子枠を設けますが、これは1学年の募集人員の14%に相当する規模になります。また、名古屋大学では工学部の2学科の学校推薦型選抜に計9人の女子枠を、島根大学は材料エネルギー学部の学校推薦型選抜Ⅱで、6人の女子枠を設け、女子の志願者を増やそうとしました。これらは、理工系女子の比率がOECD加盟国で最低水準にあることが背景にあるようです。大学にとって多様性の確保は、教育や研究にとってプラスになるという認識は強いようで、中学や高校での探究学習やSDGs（持続可能な開発目標）、科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、芸術・リベラルアーツ（Arts）、数学（Mathematics）の５領域を対象とした「STEAM教育」に触れることによって、「理工系は男子が中心の学問」という固定観念が払拭されつつあることも影響していると考えられます。さらに、女子枠の設置だけでなく、お茶の水大学、奈良女子大学の国立の女子大が工学部を新設することも注目を集めていますが、工学部は就職に強く、特に女子は企業から求められていることが、女子の工学部への志願者増加を後押しする要素になってきていますし、今後、工学部へ進学する女子が益々、増えていくことが期待されています。次に、日程別では後期日程では実質倍率（受験者数／合格者数）が２倍を切った大学が、今年は16大学ありました。さらには、入学者数に欠員が出ると実施される欠員補充２次募集では、今春は13大学で143人の募集がありました。欠員補充の実施大学数も募集数も年々増加してきています。国公立大でもあちらこちらで競争緩和の兆候がみられており、国公立大学の志願者に大きなチャンスが広がってきていることは間違いありません。最後まで粘り強く取り組むことがチャンスに繋がることを理解しておいてください。

（次ページへつづく）

次に学際系の「情報」分野ですが、こちらの志願者は増加していますが、学部・学科新設にともなう定員増によるところが多く、一概に人気が高まってきたとはいえない状況です。また、2024 年度入試についてですが、昨今、少子化により受験者の減少が進んでいますが、特に今年度は合計特殊出生率が当時、過去最低だった 2005 年生まれが受験生の中心となり、今春より約 4 万人減少すると予想されています。もちろん、大学の定員はどこの大学も経営上、簡単に減少させようとはしないので、今年度はより倍率も低下する方向にあると予想されています。しかしその一方で、2025 年度から共通テストに教科「情報」が加わり、高等学校では 2022 年から新しい学習指導要領が導入、2025 年度入試に相当する現在の 2 年生から新課程で学んだ高校生がこれに挑むことになります。最近は、変化の時代なのに変化を恐れる高校生が全国的に増えていると言われ、今年の受験生は浪人すると新課程入試で不利になるのではないかと考え、弱気の出願に流れることも予想されています。いわゆる安定志向です。では、どのように考えていけばよいかというと、2025 年度入試は様々な経過措置が取られますし、以前の共通一次試験からセンター試験、センター試験から共通テストにシフトした年度について、結果的に浪人生が不利となったことは一度もありません。当然のことですが、大学側はモチベーションの高い優秀な学生に来て欲しいわけで、そこに現役生も浪人生も関係はありません。したがって、君たちには、どっしりと構え、安易に妥協せず、高い志望を貫いていくことが長い目で見て重要だと判断し実践して欲しいと思っています。

さて、結果についての最大のトピックは地方から都市への受験生の流動化の回復と女子の志願学部の変化です。国公立大学の前期日程は首都圏、東海地方で志願者が増える一方、北海道、東北、九州で減少しているように地方から大都市圏に受験生が再び向かい始めたことを示しています。ただし、私立大については、地方から大都市への流れが回復していません。これは大都市圏で今までなら国公立大学を受けていた受験生が「共通テストはやっかいだ！」と敬遠し、私立大専願に流れた生徒が一定数存在したためで、大都市圏の私立大は合格者の入学率も高くなりました。これにより、地方の国公立大に空席が多くでき、先ほども述べましたが、例年より追加合格が多く出されました。女子の志望や入試結果の変化については、東大で顕著で合格者の女子割合が 22.3%と過去最高を更新しています。中でも法学部に当たる文Ⅰは女子割合が 30.5%、医学部の理Ⅲも 24.7%と前年より 4%も増えました。

国公立大学系統別志願状況



※河合塾調べ、前期日程で集計
※グラフ内の数値は志願者前年比（%）、濃い色は学部系統を、その右側の薄い色は系統内の特徴のある分野（抜粋）を示す

3 2023年度難関国立10大学の総括について

※難関国立10大学とは東京大、京都大、北海道大、東北大、東京工業大、一橋大、名古屋大、大阪大、神戸大、九州大のことです。

まず、難関大学全体の志願者数は69,656人と昨年度より12人と僅かですが、増加しました。増えたのは京都大、北海道大、東京工業大、一橋大の４大学で京都大、一橋大は前期と後期の両日程で、東京工業大は前期、北海道大は後期日程で増加しており、特に東京工業大と一橋大の増加が目立ちました。このうち、一橋大は新設のソーシャル・データサイエンス学部が志願に影響したと推測されています。また、比較的、募集人員が多い北海道大の後期はコロナ禍の影響緩和が進展し、北海道以外からの併願増加もあり、志願者数は4,524人と11年ぶりに4,500人を上回りました。大学別で概観すると、東京大は前年比98と減少しました。文科類では文Ⅱは前年並みの志願者が集まりましたが、文Ⅰ、文Ⅲでは減少しました。理科類では、理Ⅰで志願者減、理Ⅱで増加しました。また、京都大は２年連続で増加しました。特に経済、理学部は前年から１割以上も増加ました。次に最近人気が安定していた北海道大の「総合入試」についてですが、昨年度は理系で減少しました。北大の総合入試は、学部ごとではなく文系・理系の大きな括りで入学し、入学後１年間教養科目や基礎科目を学んだ後、自分の志望と成績に基づいて学部・学科に移行する制度で、学生の学部選択におけるミスマッチを解消する取り組みとして導入されました。また、2022年度入試からは、一部の学部・学科で「フロンティア入試（総合型選抜）」を導入しています。次に東北大についてですが、一般選抜は前期後期、文系理系ともに減少しており、特に文系は５年連続で志願者が減少しています。関西地区にある大阪大、神戸大については、大阪大は前期のみの募集ですが、大学全体では志願者が103人と微減となっています。学部別では基礎工、文学部、薬学部、法学部で増加し、他はいずれも減少、特に人間科学は大幅に減少しました。神戸大の前期はやや減少、後期は前年並みとなりました。地元の九州大の前期は前年並みで志願倍率は3年連続で2.6倍。文系では文学部と法学部はやや減少、経済学部は2年連続減少と軒並み減少となりました。さらに、学際系の共創学部も２年連続で減少しました。理系では理学部が昨年度大幅減少の反動で大幅増加。工学部は前年並み、芸術工学部がやや減少となりました。メディカル系は医学部の医学科は2年連続増加の反動と募集人員の減少の影響を受けてなのか減少しました。保健学科は逆に隔年現象により大幅増加で、特に検査技術科学、看護学で大幅増加となりました。歯学部はやや減少、薬学部は6年生の臨床薬が大幅増加の一方で、４年制の創薬科学はやや減少しましたが、志願者数は3年連続で100人を上回るなど人気の継続が見られました。農学は前年度大幅増加の反動で減少しました。後期では特に経済学部が昨年度より志願者が大幅に減少しました。

4 2023年度私立大学の総括について

私立大の志願者は前年比96％と減少しました。方式別にみると、共通テスト方式に比べ、一般方式は前年比95％と減少が目立ちました。国公立大と併願した受験生の私立大出願数は共通テスト方式でやや増加しました。共通テストの少数教科受験者が減少するなか、大学が公表した入試結果の集計では共通テスト方式の減少率が低く抑えられたのは、国公立大併願者が増えたからです。一方、一般方式では国公立大併願者は変わらず出願していたものの、私立大専願者では出願数が減少していました。このため、一般方式では減少したようです。一般選抜から学校推薦型・総合型にシフトする大学が増えており、一般選抜全体が縮小傾向にあります。また、全体の志願者数は減少しましたが、個別の大学では志願者が増加した大学もあり、明治大、関西学院大などは志願者が増加しており、人気が継続しています。

以上となりますが、さらに詳細な情報を得たい生徒は以下のページにアクセスしてみてください。

駿台予備学校大学入試情報　https://www2.sundai.ac.jp/sites/sv/news/index.html?d=Touch
河合塾Ｋネット　https://www.keinet.ne.jp/exam/
代々木ゼミナール入試情報　https://www.yozemi.ac.jp/nyushi/

（文責・松村）